３　武士の世の中　―鎌倉・室町―

地方の武士をしたがえた棟梁でもっとも有名なものが、皇室から分かれた桓武平氏と清和源氏である。その中で主に西国の武士を従えた平氏は、保元の乱、平治の乱の貴族の内部争いを利用して勢力を伸ばし、ついに政権を握った。これに対して、東国武士に信望のあった源氏は、平清盛に反抗する源頼朝の挙兵をきっかけにして、平治の乱に敗れた後の劣勢を立て直し、ついに壇の浦の戦で平氏を亡ぼした。

源頼朝はその後鎌倉に幕府を開き、京都の貴族の政府とは別に武士社会独自の政権をたて、以後七百年にわたる武家政治のもとを築いた。頼朝の政権は、将軍が自分の家来である御家人に土地を与える恩を施し、御家人はその反対に忠誠の義務を負うという御恩と奉公の関係で結ばれる主従制度を基礎としていた。そのため、頼朝以後、幕府の政権の実権を握った執権北条氏にしても、１４世紀に京都に成立した室町幕府にしても、配下の武士に所領（土地）を与えるために、貴族や寺社の持つ荘園に侵略し、貴族や寺社の経済的基盤を奪っていった。その中で封建制度が拡大し、社会の仕組の基本として成長していったのである。ここでは、こういう封建制度の発展の姿を、相模の国を中心に、政治の動きと関連させてみていこう。

１　源頼朝と武士の政権

石橋山の合戦　１１５９年（平治１）の平治の乱で、平清盛に敗れた源義朝の子の頼朝は、幼かったので一命を助けられ、伊豆の蛭が小島に流された。政権を握った平清盛以下平氏一門は、かつての藤原氏以上に繁栄したが、貴族の中にも武士の中にも、これに反発するものも少なくなかった。その情勢の中で高倉宮以仁王は、１１８０年（治承４）の春、全国の源氏に平氏討伐の命令を出した。

伊豆にいた頼朝は、平氏の監視が厳しい中でついに八月、伊豆、相模の武将を味方に伊豆で挙兵し、鎌倉に向かった。その総勢は、３００騎の少数であった。途中石橋山まで来た時、総勢３，０００騎という大勢力の平家方にはさみ討ちされた。その総大将は大庭景親（藤沢市）で、やはり相模・伊豆の武将を従えていた。両軍は互いに谷を隔てて東西の峰に対陣した。８月２３日の夜、豪雨の中で

決戦が始まり、頼朝側は死力を尽して戦ったが、敗れて箱根山に逃れた。

この戦に頼朝方の先陣を引き受けた真田与一義忠（平塚市真田）は、敵将俣野景久と戦い、一騎打ちとなったが、景久方の長尾新六定景に刺されて最期をとげた。この激闘の場所は「ねじり畑」という地名となって残り、近くには佐奈田霊社が建立され、義忠の霊がまつってある。

佐奈田霊社

さて、平氏の軍勢に敗れた頼朝は、箱根・湯河原の山中を逃げ、ある時は大杉の空洞に隠れ、ある時は箱根権現に救いを求めたりして、危うく難を逃れることができた。頼朝に初めから味方した武士の中には、湯河原の土肥実平の一族があり、その土地の事情に詳しい実平の道案内によって敗戦から五日後、真鶴の海岸から夜ひそかに船で安房国（千葉県）へ逃れた。このことを詳しく書いた「吾妻鏡」や「源平盛衰記」によって、この戦における敵味方の武士を眺めてみると、二宮辺の中村、湯河原の土肥、平塚の土屋の一族は頼朝側につき、河村・曽我・波多野氏一族は平氏側につくというように、同じ土地の武士でも源氏平氏に分かれて戦った。平氏側の総大将大庭景親の兄の大庭景義は頼朝に味方し、箱根権現の別当行実は頼朝を助けたが、弟の智蔵坊は平氏側についた。頼朝と源氏の将来に期待する人、当時の実力者平氏の威光に従う人とさまざまであり、これは、自分の土地や権益を守るためには、どちらに味方をしたら有利かを考えたからであろう。

安房国に着いた頼朝は、土地の千葉介や上総介という大豪族の協力を受け、１か月余で鎌倉に入った。この頃になると、東国の武将たちは、先には敵になったものまでも次々に頼朝の家来となった。その２か月後、富士川で平維盛と対陣した時には、２０万余騎といわれるほどの大軍を動員できる強い勢力に発展していた。そし

て、１１８５年（文治１）の源平最後の合戦となった壇の浦（山口県）の戦で平氏をほろぼし、１１９２年（建久３）頼朝は、ついに征夷大将軍となって武士の政権をたてた。古くから三浦半島に一族が分布していた大豪族三浦氏の一人の和田義盛を、侍所の長官に任命して御家人を統率させた。平氏の旧領地や、河村氏・波多野氏など、初めから敵方であったものの土地は没収して忠功ある御家人に与えた。そして舅の北条時政を重く用い、全国の荘園には地頭を、諸国には守護を置くことを朝廷から公認してもらった。こうして、軍事警察権を公的に認められた政権として成立したのである。

曽我兄弟の仇討ち　頼朝が将軍になった翌年、富士の裾野で大巻狩（狩猟）が、軍事演習を兼ねて行なわれた。この時、曽我十郎、五郎の兄弟が、１８年前に父河津祐泰を暗殺した工藤祐経を斬る事件がおきた。

兄弟の墓

この巻狩は、５月上旬から６月上旬にかけて約１か月行なわれたもので、馬の上から弓を射る武芸をみがく、鎌倉武士の実戦的訓練であった。５月２８日の夜、激しい雷雨をついて兄弟は工藤祐経の寝所をおそい、父のかたきを討った。将軍が寝ている本陣近くであったので、兄弟は多数の侍に囲まれ、ついに兄の十郎は仁田四郎忠常に斬られ、弟の五郎は捕われて翌日斬首された。この事件は、人々の間に「語り物」として語られ、後に室町時代になって本となった。その「曽我物語」という本で、悲劇の主人公、父の仇を討つ孝子として兄弟の話がもてはやされ有名になった。鎌倉時代に幕府の手によって編さんされた「吾妻鏡」にも載っているので、おおよその内容は事実と考えてよいであろう。

仇討ちの遠因は領地争いにあった。工藤祐経の父祐継は、伊豆に

伊東・宇佐美・久須美の三荘園をもっていた。兄弟の祖父伊東祐親は、工藤氏の従弟にあたり、やはり伊豆に河津の荘を持っていた。伊東祐親は祐継が死ぬと、その子の祐経がまだ幼いのに乗じて、工藤氏の三荘園をうばってしまった。そこで祐経は、伊東祐親を討とうとしたが果せず、祐親の長男の伊東祐泰（兄弟の父）を殺してしまった。祐泰には一万・箱王という２人の子があった。母はこの二児を連れて、河津の荘から相模国の曽我の荘の曽我祐信のもとに再婚した。兄弟も養父の曽我の姓を名のり、元服後、兄は曽我十郎祐成、弟は曽我五郎時致と改め、父の仇を討とうと苦心したのである。

なお、ここで重要なことは、この仇討ちの成功のかげには、兄弟と親類関係にあたる土肥一族や、五郎が元服した時の烏帽子親でやがて執権になった北条時政という幕府内部の実力者が、後立てになっていたらしいということである。

山内首藤氏の所領　「吾妻鏡」をみると、土肥氏・小早川氏・山内首藤氏・曽我氏・大友氏・飯泉氏など、小田原近辺に所領をもつ武士がしばしば見える。

土肥実平は、中村の荘（中井町）の豪族中村氏の次男で、一族に土屋・二宮氏などがいた。実平は、源頼朝の石橋山の合戦以来幕府の創立に活躍したので、頼朝から信頼され、幕府内でも諸将の長老として尊敬を受けていた。平氏追討にも実平の活躍は続き、源義経と共に一の谷や屋島の戦に参加した。平氏滅亡後は、中国五か国の総追捕使をはじめ、安芸国の守護となった。孫の惟平の時に、和田義盛の反乱に参加した。この乱は、侍所の長官であった和田氏を除いて実権を握ろうとする執権北条氏が義盛らを攻撃したものであるが、この時、相模の武士の多くは和田方につき、惟平も和田方として戦死した。その結果、子孫の多くは安芸国（広島県）に移住することとなった。そして、安芸国に新しい御恩の土地をもらって、そちらにも一族が繁栄した。しかし、小早川季平という一族の一人は成田の荘に所領を持っていたので、全く縁がなくなったわけではない。

山内首藤氏は、はじめ鎌倉の山内に住む武士であったが、頼朝の挙兵の時に敵となったので、追放された。ところがその経俊という人は、頼朝の乳母の子であったので、乳母の関係で早川の荘内に土

地を与えられた。それは、早川の荘内の「一得名」という名田で、田子（多古）に屋敷がある他、数か所に田地があった。

荘園が成立するところでも述べたが、新しく開墾した土地には地名がなかったので、開発した人の名をつける場合があった。この場合の「一得名」もそうであろう。今はこの地名を伝えていないが、この一得名のような開発された田を名田と呼び、開拓主を名主という。しかし、かれらは武士であり地主であって、実際に耕作していたのは家来や下人であった。首藤氏は、１２３０年（寛喜２）この一得名を子に譲ったが、その時の譲り状をみると、当時の農民生活が想像できる。

一得名は総計五町二反の水田があって、三町二反は首藤氏が直接下人を使って耕作し、残る二町を五戸の農民に請作させていた。このうちの四戸は、年貢を納めている請作人で、名主の仕事も手伝う義務を負わされた。残る一戸は宮司で、やはり下人に耕作させて名主に年貢を納めていた。一得名では、こうした三種類の階級に分かれて水田耕作をしていた。各地の荘園も、このような形で耕作していたと思われる。

早川の荘には、他にも久富名、長尾名という名田があった。成田の荘でもおそらく同じような方法で田が耕されていたであろう。

大友郷を開発したといわれる大友氏、この早川の荘に一得名をもっていた山内氏、そして早川の荘全体の地頭であった土肥・小早川氏らは、先にあげた和田氏の乱に参加して敗れてからは、北条氏の力が東国で強くなるのを恐れて、九州や中国地方に移っていった。しかしそれは同時に、東国を基礎に出発した武士政権が、全国的な規模に勢力を拡大することでもあったのである。

箱根権現

箱根権現の役割と交通の発達　箱根権現は、頼朝の挙兵の時に援助をしたこともあって、幕府が成立すると、将軍をはじめ武士たちの尊崇の的となった。幕府は、伊豆国の三島神社、伊豆山の走湯山と、この箱根権現を厚く保護し、社領を寄付するとともに、年に一度は必ず使いを参詣させた。将軍も代替りには必ず参っている。

権現の別当で信救という人がいた。はじめは奈良の僧で、木曽義仲の家臣でもあったが、学識の高い人であった。先に述べた箱根権現の縁起は、この信救が書いたものであるが、こういうすぐれた僧侶を中心に、箱根権現には多くの学僧が集まっていたようである。曽我兄弟の話が箱根権現の神の霊験のたまものという風にまとめられて、多くの人々の間に親しまれ、室町時代の頃に「曽我物語」という本になるまでにまとめられたのは、この箱根山に学ぶ僧侶たちの努力であるといわれている。

また、観音信仰や地蔵信仰が武士や農民の間にひろまったのも、この時代の特色であった。闘いの中で生命を落とすこともあり、農業のために虫や獣を殺すこともある。農村の農業生活と結びついたこの時代の武士たちは、死後の世界に強い関心をもった。そういう時に、極楽浄土に導き、往生を助けてくれる仏として、観音菩薩や地蔵菩薩に対する信仰が生まれたのである。頼朝や妻の政子は、千代にあったとされる弓削寺（現飯泉観音）や金目の観音堂にお参りしている。険しい山道の箱根が、地獄極楽の賽の河原として考えられ、地蔵菩薩の石仏群が作られたり、大きな供養の五輪塔が建てられているのもその表われである。仏教が、国家のものから民衆のものとなっていくことは先にも述べたが、それは、いわゆる新興の仏教諸宗（浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・禅宗）などに限られたのではなく、こういう古い真言宗の寺院や僧侶の活動もあったのである。

権現への参詣が増えたことは、箱根路という新しい道の開発を進めたことになる。現在、湯本から芦の湯の近くに出るハイキングコース「湯坂道」があるが、これは幕府の命によって造られた鎌倉時代の街道であった。

武士は自分の所領のことで裁判が起こると、鎌倉に来て相手と対決をしなければならない場合があった。１３世紀の終わりに、歌人藤原為家の未亡人の阿仏尼は、播磨国（兵庫県）の荘園をめぐっての訴訟に当たって、子のためにわざわざ京都から鎌倉へ下った。

その時の紀行文が「十六夜日記」であるが、その中に「湯坂山をこえる時、あまり急なので足がとまらず、やっとの思いでこえた。」と、当時の険しい箱根路の様子を記した。

また、蒙古襲来のあとで恩賞を願った九州の御家人竹崎季長は、自分の奮戦の様子を絵巻物に描かせた人であるが、彼も鎌倉まで下向し、途中箱根権現にお参りして祈願を込めている。このように多くの人が箱根道を利用するにつれて、小田原地方に変化が起こった。

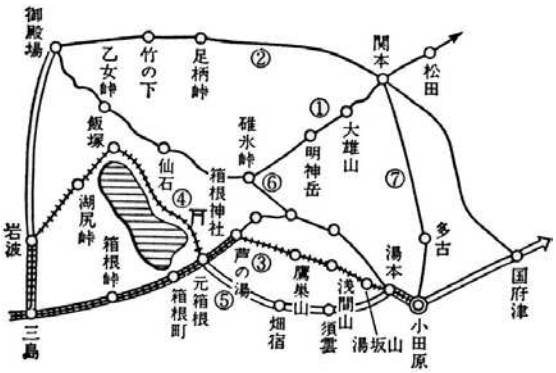
足柄道の宿駅として栄えた小総駅（現在の国府津親木橋付近にあったとされる）が衰えて、酒匂宿がこれにかわった。鎌倉時代、東海道は湯坂道から湯本を経て早川に沿って海岸に至り、酒匂に抜けたのであろう。

この頃の小田原は、まださびしい集落であった。その様子を、阿仏尼の子である冷泉為相は「海道宿次百首」の中で、次のようにうたっている。

「つくりやらぬ夏の荒小田はらいかね　よもぎながらや今かえすらむ」

現在の湯坂道（右）と
箱根越えのうつりかわり（下）

（「小田原･足柄の歴史」より）



しかし、１２６５年（文永２）の「相州小田原住泰春」と銘のある刀があるので、この集落にも刀鍛冶を専門とする職人が住んでいたことが知られている。

2　鎌倉府の支配と小田原地方

後醍醐天皇の討幕運動　小田原文学館の近くに、小田原市指定文化財の史跡「平成輔の墓所」というのがある。平成輔は、鎌倉時代の末、大覚寺統（のちの南朝）の後醍醐天皇に仕え、参議や弾正大弼などの官職についた貴族である。この人の墓がどうして小田原にあるのかというと、後醍醐天皇が中心となって幕府を倒そうとした元弘の変にかかわりがある。天皇は以前にも正中の変という討幕運動に失敗したが、今回も事前に幕府に知られ、幕府軍が京都を攻めるにおよんで、平成輔ら天皇に協力していた貴族や武士は捕われた。天皇も捕われ、翌年隠岐島に流され、持明院統（のちの北朝）の光厳天皇が即位した。平成輔らは、鎌倉に送られて処罰されることになり、途中の早川近くに来た時、成輔は殺された。それは、１３３２年（元弘２）のことであった。

その後に幕府軍の将、足利尊氏が天皇側につき、反転して六波羅探題（京都）をおとした。一方東国では、新田義貞が北条氏に反感をもっている武士たちの軍をひきいて鎌倉をおとしいれ、執権北条氏を亡ぼした。こうして１３３３年（元弘３）頼朝が幕府を開いてからおよそ１５０年で、鎌倉幕府は滅亡した。

平成輔の墓所

建武の新政と箱根竹の下の戦　後醍醐天皇は京都に帰ると、あらためて天皇中心の復古政治を始めた。これを建武の新政という。しかし、天皇の政治は理想主義に過ぎたため、武士の支持を失い、２年で失敗してしまう。それは、武士の支持を集めた足利尊氏が、競争者ともいうべき新田義貞を討つと称して、天皇の新政府に反抗したからである。

長い間幕府のあった鎌倉は、先の義貞の攻撃で灰となった。その後に、尊氏は弟直義を置いて守らせていたが、北条高時の子時行と旧臣たちが奪還の戦をしかけ占領した。駿河国まで逃げた弟たちを助けるために東国に下った尊氏は、時行らを破って鎌倉に入ったが、そのまま京都に帰らなかった。そこで後醍醐天皇は、義貞に尊氏追討を命じ、義貞は大軍をひきいて下向し、箱根山で戦ったのである。足利軍は、箱根路と足柄道で新田軍をくいとめようと二つに分かれたので、攻撃の新田軍も二つに分かれて攻めた。新田軍は、箱根路では大半を破り有利に戦いを進めたが、足柄道で味方に寝返る者が出たため、不利になり、ついに退却せざるを得なくなった。これを箱根竹の下の戦と呼んでいる。

この後、尊氏は義貞を追って京に攻め上り、義貞を破り、義貞は九州へ逃れた。しかし､諸国の武士の多くは天皇中心の新政府より、昔の幕府政治を懐かしみ、尊氏を将軍として仰いだので、大勢力となった。尊氏が湊川の戦で楠木正成を破って京都に入り、後醍醐天皇を捕え、位を光明天皇に譲らせるとともに、建武式目を発令して新しく幕府を京都に開くことを宣言した。

鎌倉府の支配　東国、特に鎌倉は頼朝以来、武士政権の所在地として重要なところであった。尊氏は幕府を京都に開いても、いざとなれば鎌倉に帰ろうと考えて、ここには子の義詮を置いた。後、義詮を将軍の後継に決めて京都に呼び寄せてからは、その弟の基氏を置き、これを関東管領とした。この管領は、後には鎌倉公方または関東公方と呼ばれ、これを助けた執事の上杉氏のことを管領というようになったが、公方の役所を鎌倉府という。当時の人は公方を御所とも呼んだ。鎌倉府は、関東八か国に伊豆、甲斐をあわせた１０か国を支配する幕府と同じものであり、役所も大体室町幕府と同じであった。

鎌倉府の支配下に入った相模国の小田原地方については、ほとんど史料がない。この時代は、吉野に逃れた後醍醐天皇の南朝方と、京都の北朝＝幕府方との２つに諸国の武士が分かれて互いに戦いあう、南北朝の内乱の時代である。全国的に尊氏方の下につくことをきらう武士も少なくなく、また同じ北朝方でも互いに対立しあったりすることが多かったため、６０年余も戦いが続いた。相模国は公方の近くであるにもかかわらず、伊豆国を支配する畠山氏が土肥氏と早川尻で戦うなど、戦乱の止むひまがなかった。山北地方の河村氏のように、終始南朝の年号を使って足利氏に反抗していたものもあった。こういう時代であったため、おそらくこの地方の民衆の生活は安らかなものではなかったであろう。

小田原地方には、この時代の年号を記した石碑がいくつか発見されている。また、市立白鷗中学校の西側に首塚がある。義貞が、１３３８年に北陸の越前（福井県）で戦死した後、家来が首を持ってここまで来て病死したという伝説で、新田義貞の首塚としているが、この話が事実である証拠はない。山北方面でも、同様の話を伝えた家がいくつかある。結局、戦乱に明け暮れた人々が、平和と安定を願って仏に供養するという心から造られたものが、別の話と結びついて「義貞」ということになったのであろう。

大森氏の小田原支配　大森氏は、今の静岡県御殿場市と小山町一帯にあった藍沢の荘をもっていた武家で、先祖は源頼朝に仕えた御家人であった。３代将軍義満によって内乱が治まり、南北２朝も合体して天下が統一され、鎌倉には御所として氏満が君臨していた応永の頃､大森頼明の代を迎えた。かれは南足柄市に春日山城を築き、相模地方進出の足場を作った。そして、大雄山最乗寺を建立した。

そのころ、上曽我に了庵慧明禅師という僧がいた。禅師は、明神岳の麓が唐の国にある霊山に似ているので、この地に禅の道場を開こうと計画し、禅師に帰依していた頼明の援助で、１３９４年（応永元）雄大な寺院を造りあげた。これが最乗寺である。曹洞宗で、大本山永平寺や総持寺に次ぐ権威をもつ寺院である。

１４１６年（応永２３）大森頼春の時、禅秀の乱が起こった。この乱は、鎌倉公方の管領をやめた上杉氏憲（禅秀）が、氏満の後をついだ御所（公方）の足利持氏に反乱した事件である。持氏はこの

大雄山最乗寺

時鎌倉から小田原に逃れて来たが、土肥・土屋・松田・河村氏など西湘の武士のほぼすべてが禅秀に味方したので、大森頼春に救いを求めた。そして、頼春の働きで駿河（静岡県）の大名の今川氏の援軍が来て、持氏はこの乱をしずめることができた。この手柄で頼春は、土肥氏や土屋氏などに代わって、小田原地方を支配し、小峰山に小田原城を築いた。

持氏は禅秀の乱をしずめると、禅秀方についたものを厳しく責めた。このことは京都の将軍家の警戒するところであり、京都と鎌倉の間の空気は緊迫した。頼春の後を継いだ大森憲頼（のりより）は、三浦半島の三浦氏と並んで西側の要として持氏に重用されたが、１４３７年（永享９）には河村氏の拠（よ）る河村城を落として、小田原から足柄平野一帯箱根の北麓地方までを支配した。そして、その翌年ついに室町将軍足利義教が関東公方持氏を攻める永享（えいきょう）の乱が起きると、来攻する今川氏以下の軍勢と箱根で戦っている。この結果、持氏は敗れて自殺し、関東地方には主人がいない混とんとした情勢が生まれ、乱世の様相をおびてくるが、大森氏の支配には変化はなかったようである。ただ、この永享の乱が終わって間もない嘉吉（かきつ）年間に、大森頼明の第三子で頼春の弟にあたる安叟（あんそう）という禅師が、久野に総世寺、早川に海蔵寺を建立している。さらに時代は下

るが、湯河原の保善院、塔の峰の阿弥陀寺も安叟が建てた。頼春の弟で安叟の兄になる証実は、箱根権現の別当*となっており、大森氏が箱根山の周辺を政治的に支配している時に、寺院を建立して、支配下の領民の精神的安定を図っていることは注目される。

大森氏が最盛期を迎えるのは、頼春の子氏頼が城主になった時である。その領地は相模川以西から駿河にわたり、三浦氏とも姻戚関係を結んで、南関東では有力な武家となった。

*別当（大きな仕事を統括した僧）

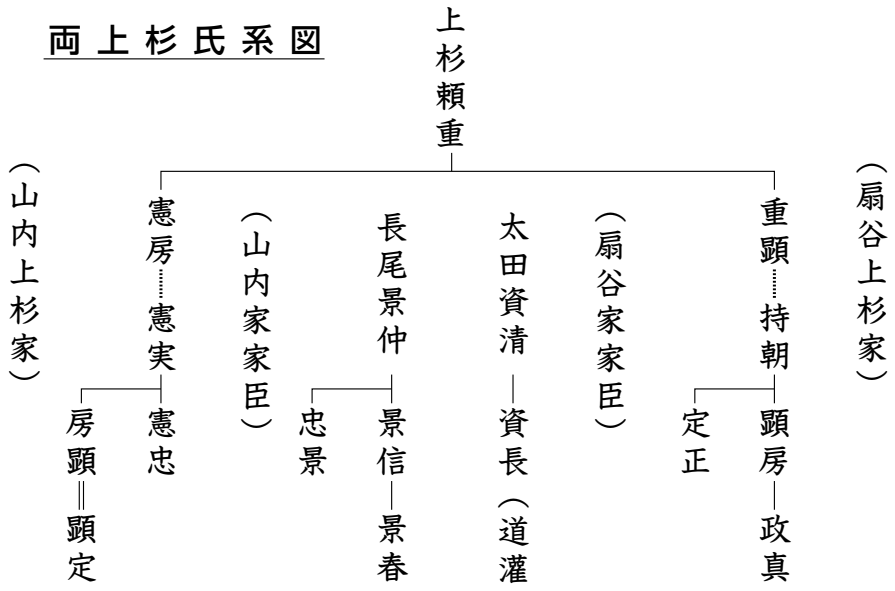
4　小田原北条氏と小田原
―室町（戦国時代）・安土桃山―

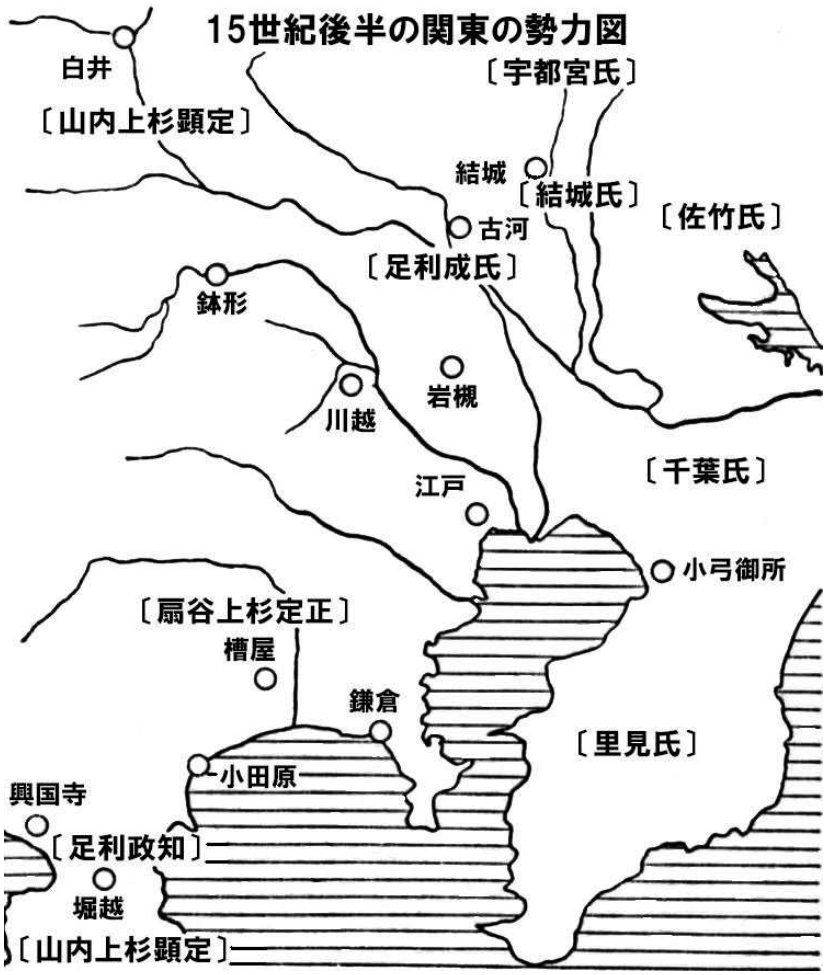
室町時代の中頃１４６７年（応仁元）に、京都を中心に始まった「応仁の乱」は、以後、約１００年にわたる戦国時代の幕開けとなった。戦乱は全国に広がり、実力のある家臣や地侍が旧来の主君を倒す「下剋上」といわれる風潮が全国的に広がっていった。こうした情勢の中で、一定の領域を実力で支配する戦国大名が現れてきた。小田原北条氏はその代表といえる。

関東地方では、この応仁の乱以前に「上杉禅秀の乱」や「永享の乱」が起こっていて、すでに乱世の状況であった。永享の乱の後、鎌倉公方になった足利成氏は、関東管領上杉氏によって鎌倉から下総（茨城県）の古河に追いやられてしまい（古河公方）、関東の実権は管領の上杉氏が握っていた。その上杉氏も、長享の乱以降、憲房の山内家と一族の扇谷家とが対立し、関東の豪族もどちらかに属して互いに争うようになった。

この情勢の中で、勢力を盛り返してきた古河公方足利成氏に対抗するために、室町幕府は八代将軍足利義政の弟政知を関東の主として送り込んだ。政知は、鎌倉が戦乱で荒廃していたので、伊豆の堀越（伊豆の国市）に御所を構えた。これを堀越公方という。関東地方は２人の公方（古河・堀越）と２つの上杉氏（山内・扇谷）が対抗するという混乱状態に入ってしまったのである。

両上杉氏系図


上杉頼重
（扇谷上杉家）
重顕……持朝
定正
顕房―政真
（扇谷家家臣）
太田資清―資長（道灌）
長尾景仲
景信―景春
忠景
（山内家家臣）
憲房……憲実
憲忠
房顕＝顕定
（山内上杉家）


15世紀後半の関東の勢力図
白井
〔山内上杉顕定〕
〔宇都宮氏〕
結城
〔結城氏〕
〔佐竹氏〕
古河
〔足利成氏〕
鉢形
岩槻
川越
〔千葉氏〕
江戸
小弓御所
〔扇谷上杉定正〕
槽屋
鎌倉
〔里見氏〕
小田原
興国寺
〔足利政知〕
堀越
〔山内上杉顕定〕

1　北条五代

早雲の登場　早雲の出生については、従来、多くの説があったが、備中国江原荘（岡山県）の高越山城主、伊勢盛定の子盛時とする説が現在では最も有力視されている。

盛時は九代将軍足利義尚に仕えていたが、１４７６年（文明８）駿河を治めていた今川義忠の戦死によって今川家の家督争いが起こると、義忠の正室であり、盛時の姉北河殿の生んだ竜王丸の後見人として争いを解決した。そして後に竜王丸が今川氏親となり家督を相続すると興国寺城（沼津市郊外）を与えられ、その後、今川氏の勢力を背景に、伊豆の堀越公方足利茶々丸を滅ぼして、韮山城を本拠にして伊豆一国を支配する勢力に成長した。

伊勢盛時は「北条早雲」の名で呼ばれることが多いが、盛時自身が「北条」と称したことはなく、「伊勢」の名字が「北条」に改められるのは子の氏綱の時である。また、「早雲」というのは「早雲庵」という、盛時が出家後に営んだ庵の名であり、出家後に称した

湯本早雲寺と北条五代の墓

法名は「宗瑞」である。歴史上の人物の呼称は、当時の名字と実名（法名）を合わせて呼ばれており、「伊勢宗瑞」と呼称するのが妥当であるが、本書では、一般になじみの深い「北条早雲」で記述したい。

１４９４年（明応３）、扇谷上杉定正は、山内上杉氏との戦いの際に不慮の事故で死去し、三浦地方の豪族三浦時高も暗殺されるなど、扇谷上杉氏の勢力は次第に弱まっていた。このような情勢の時に、扇谷上杉氏の有力な部下であった小田原城主大森氏頼も病死した。後を継いだ藤頼は領国を支配できる実力もなく、１５０１年（文亀元）までには、早雲に小田原城を奪われてしまった。

早雲は小田原城を奪取したのち、足柄地方に勢力を持つ松田氏などの豪族を従わせて実力を蓄え、１５１６年（永正１３）三浦半島の三崎城の三浦義同（道寸）を３年がかりで攻め滅ぼし、相模一国の支配に成功した。

そして、１５１９年（永正１６）８月１５日、早雲は、伊豆の韮山城でその波乱に満ちた生涯を閉じ、あとを継いだ氏綱が建立した湯本の早雲寺に葬られている。

小田原北条氏の発展と領国支配　早雲のあとを継いだ氏綱は、本拠地を韮山城から小田原城へと移し、１５２３年（大永３）には、名字を「伊勢」から「北条」に改めている。氏綱は伊豆に加え相模の国主となったが、正当な相模国主は守護職を継承している扇谷上杉氏であり、伊勢氏は関東ではよそ者の侵略者と見られていた。前時代における相模の正当な支配者であった執権北条氏の名跡を継承することで、自らの相模支配の正当化を図っていったといえる。歴史上、小田原の北条氏を、鎌倉執権の北条氏と区別するため、小田原北条氏と呼ぶ。

氏綱の次の目標は武蔵（神奈川県東部・東京都・埼玉県）の支配であった。１５２４年（大永４）に扇谷上杉朝興の家臣、太田資高を味方にひきいれ、江戸城を攻略した。江戸城は当時関東平野の流通を担う重要な河川が集まるところでもあり、氏綱は江戸城を拠点に武蔵北部や下総（千葉県）への侵攻を進めていった。

氏綱の行った多くの戦いの中で関東支配に大きな足がかりとなった戦いが、１５３８年（天文７）の第１回国府台合戦である。この

戦いで、古河公方足利晴氏を助けて勝利した氏綱は、晴氏に娘を嫁がせ「足利氏御一門」となり、関東管領職を獲得し、関東における政治的地位を著しく向上させた。

１５４１年（天文１０）氏綱は５５歳で没したが、伊豆・相模に加えて駿河の富士川以東、武蔵南部、さらに上総・下総の西部から安房の西北部にまで勢力を拡大していた。氏綱の跡を継いだのは嫡子氏康（２６歳）である。その頃、甲斐（山梨県）には武田信玄が、越後（新潟県）には長尾景虎（後の上杉謙信）がそれぞれの領国を支配していた。氏康は、これらの戦国大名と、時には争い、時には和を結びながら関東地方の支配体制を充実させていった。

氏康最大の危機は、山内上杉憲政が扇谷上杉氏や足利晴氏に呼びかけて、連合勢力を結集し小田原北条氏に対抗した時である。憲政はさらに今川氏や武田氏とも同盟を結び、氏康は孤立してしまった。１５４５年（天文１４）氏康が今川氏と戦っているすきをついた憲政・晴氏の連合軍約８万が、武蔵川越城を取り囲んだ。

領国の東西から攻撃を受け、晴氏にも見捨てられた氏康は、この窮地を脱するためにまず、富士川以東の領地を放棄することを条件に、今川氏・武田氏との講和を成功させた。その後、手兵約８，０００をひきいて川越城の救援に向かった。しかし、１０倍の敵にすぐに合戦を挑まずに、「籠城している３，０００の兵の命ばかりは助けてくれ、その代り、城と領地は差し上げる」と申し出ている。これは相手を油断させるための計略ともいわれるが、定かではない。この川越合戦の経過については不明の点が多いが、激戦の末、小田原北条軍の大勝利となり、扇谷上杉朝定は戦死し、扇谷上杉氏は滅亡した。山内上杉憲政は、上野平井城（群馬県）に逃れ抵抗をしたが、後に越後の長尾景虎のもとに逃れた。この戦いを機に、関東の有力な領主が小田原北条氏の傘下に入り、上野国も小田原北条氏の支配下に入った。

氏康は、その後いくたびか戦ったが、戦いばかりでなく、支配下にある百姓の保護をはじめ、職人や文化人などの活動をさかんにし、いくつかの改革をしながら民政を行なった。その一つ、税制について述べてみよう。

小田原北条氏の税制は、図に示したような仕組で、小田原北条氏が直接治めている御領所と小田原北条氏の家臣に与えられる知行地

とに分れ、いずれも本年貢（本税）と賦課税（役銭）が課せられていた。そのうち小田原北条氏へは、御領所の両税と知行地の賦課税が納入され、知行人（小田原北条氏の家臣）には、知行地の本年貢の徴収が認められた。

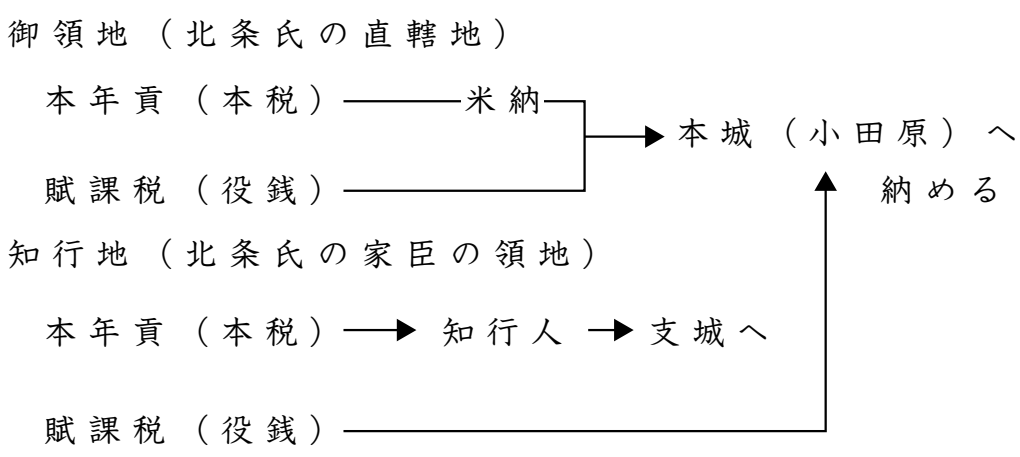
本年貢は、田・畑に課せられる税金で、「四公六民」といわれ、収穫高の４０％を納めた。

１５５０年（天文１９）に、相模・武蔵に出した命令に、「領国中の諸郡が不作なので、今年の４月から村々の公事（雑役）を免除する。今後は、いままでの諸点役（一国平均の課税）は廃止して、新しく百貫の地より六貫文（６％）の役銭を徴収する。……（中略）…… そしてこの地には、今後はどんなにこまかい徴収も百姓らにしてはいけない。……（中略）…… 百姓らに諸公事をかける者がいたら、百姓らは小田原に直訴せよ」というのがある。

つまり、知行人が、小田原北条氏の許可なく勝手に税をかけているのをきびしく取り締まり、知行人の横暴を抑えようとしたものである。

このほか、城の修理や道路作りなどにかり出される普請役というものがあった。これは、百姓に限らず職人にも課せられており、１日遅れると罰として５日間働かされた。また、百姓や職人は、戦い

小田原北条氏の税制



が始まれば城の守備要員等として動員された。百姓は戦国大名の経済的な基盤であると共に、戦力という両面をも担っていた。それだけに苦しい生活が続き、村を逃げ出す逃散や年貢を取り返そうと訴える者が出た。こうしたところから、小田原北条氏の税制改革が行なわれたり、氏康によって、逃げ出した百姓を帰農させるための「人返し令」が出されたりしたのである。

また、戦いに備えるため、各地の侍や職人の貫高を基準に軍役を定めてもいる。それらは支城ごとにまとめられたが、今日「小田原衆所領役帳」といわれて、家臣団の規模や兵力を知る貴重な資料となっている。

１５６１年（永禄４）、早雲以来一度も攻められたことのない小田原城は、約１０万の大軍に取り囲まれた。長尾景虎の小田原攻めである。彼は、鎌倉を奪回し、関東管領職に就任しようとする考えからこの作戦を行なった。三国峠（群馬・新潟県境）を越え、沼田城・厩橋城（前橋市）などいくつかの城を攻め落し、小田原城外に迫った。氏康・氏政父子は、兵を城内に集結させ、籠城戦法をとる一方、武田氏に応援を求め、景虎の後方を攻めさせた。景虎は、連日激しく攻めたが、突破口を開くことができないままに兵を引きあげた。

景虎は帰途鎌倉八幡宮に参詣し、そこで上杉政虎と改名し、同時に、正式に関東管領職に就任した。

１５６９年（永禄１２）、こんどは武田信玄が攻めてきた。この時も、小田原方は籠城戦法を用いて対抗した。兵糧に困った武田方は、海岸を通り、風祭村に火を放って引きあげた。追撃に移った小田原北条軍は、津久井郡と愛甲郡の境にある三増峠で武田軍と激しい戦いを行なったが、山岳戦に強い武田軍によって、約３，０００の犠牲を出して大敗した。このように、２度にわたって城を囲まれてもよく守った氏康は、その後、１５７１年（元亀２）、５７歳の生涯を閉じた。家督は永禄４年、嫡子の氏政が継いでいた。

小田原城の規模　小田原城は、箱根外輪山の裾野が、東の海岸に張り出した丘陵の先端と前面の平地とを取り入れた「平山城」である。さらに、城下町を囲む総構という土塁と堀がめぐらされている大城郭であった。この土塁は、東の山王川河口から渋取川に沿って

北西に向い、西は箱根外輪山の先の丘を取り入れ、城の南の低地を包み早川口に達していた。東西約３㎞、南北約２㎞、外郭線の延長約９㎞といわれ、後の大阪城や江戸城と並ぶくらいの大きなものであった。平山城の形式は、中世から近世へ移る途中の城郭建築で、その代表的なものとしては、尾張（愛知県）の犬山城があげられるが、小田原北条氏の小田原城は、総構で城下町をすっぽりと包む広大なものであった。

総構の各所には、山王（江戸）口・板橋（上方）口・井細田口・谷津口・早川口などの城門を設けていた。この総構は、のちに豊臣秀吉の小田原攻めに備えて、整備造成が行なわれたもので、秀吉や家康でさえも破ることができなかった。現在でも、市内浜町の蓮上院や城山公園内の慰霊塔付近に史跡として残っている。

徳川家康は、天下を統一した後、小田原城二の丸・三の丸の城門や櫓を壊してしまった。それは、大名が大軍を小田原城に集結させて籠城するということを非常に恐れたためといわれる。

小田原北条氏は、山王口付近に「篠曲輪」という構をつくった。自然の河川を利用したり、水路を掘りめぐらしたりしていた。小田原攻めの時に家康の部将井伊直政が、７０日かけてやっと占領した

小峯御鐘台大堀切東堀

城山公園の奥にあり、堀の両側が土塁となっている。

といい、規模は小さいが守りに徹した曲輪であった。

また、小田原北条氏は、領国内に多くの支城を設けていた。代表的な支城としては、岩付城（埼玉県岩槻市）・川越城・忍城（埼玉県行田市）・鉢形城（埼玉県寄居町）・江戸城・八王子城・玉縄城（大船付近）・韮山城などがある。

この中で、忍城は、荒川や利根川の支流をうまく利用したり、人工の水路や周囲の水田を巧みに利用したりして守りを固めた「沼城」という性格が強かった。小田原攻めの時は、付近の百姓や職人がすべて城内にこもり、小田原城落城後も約半月、秀吉の武将石田三成らの軍に抵抗し続けた。

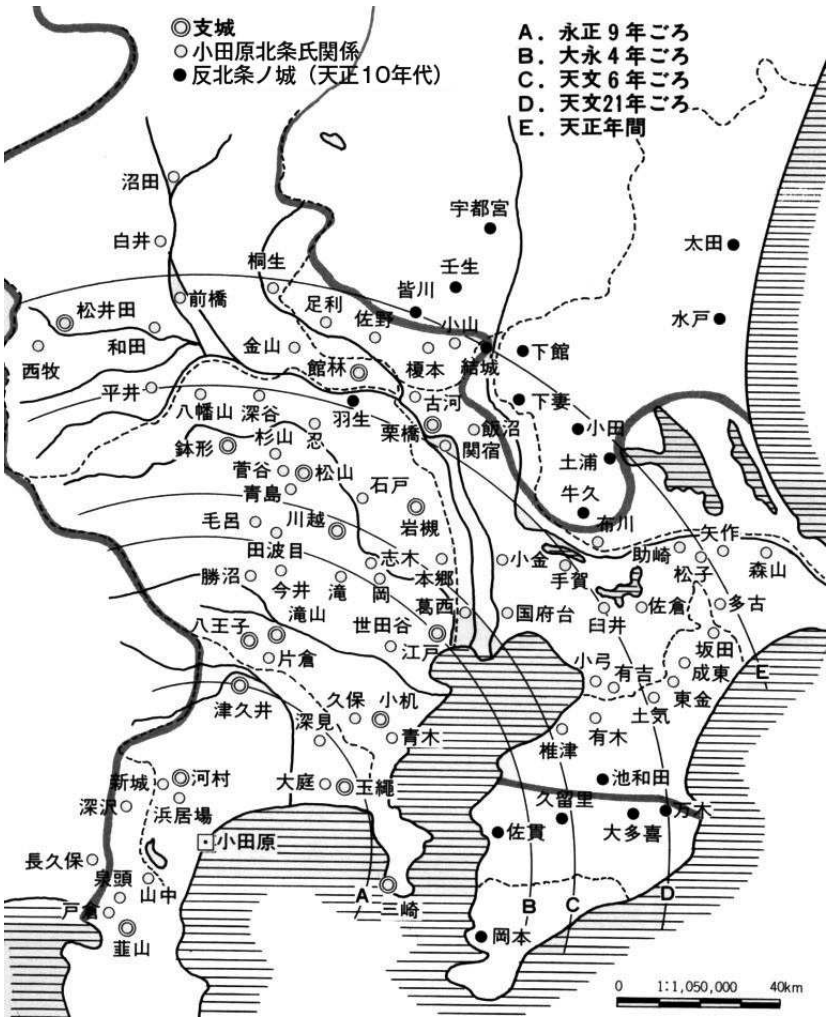
小田原北条氏の滅亡　氏康の後の氏政・氏直の時代にはうち続いた戦国時代も終りに近づいてきた。織田信長の京都上洛と室町幕府の滅亡１５７３年（天正元）、そして尾張の一足軽の子から身をおこした豊臣秀吉は、天下統一への動きをさらに前進させた。主君織田信長の後を受けて数多くの敵を滅ぼした後、九州の島津氏をも従わせた秀吉は、次に残った関東を支配しようとしていた。小田原北条氏も、近い将来、秀吉の小田原攻めは必至であると考え、城の内外の修理、武器の増産、食糧の貯蔵、民兵の召集などを行なった。

例えば、１５８９年（天正１７）７月、小田原城内に、大きな倉庫を作るため、愛甲郡の百姓に木材の切り出しを命令したり、翌年の１月には、城の大修理を武蔵の住民に命令するなどの記録が残されている。

秀吉が小田原を攻めるきっかけとなったのは、１５８９年（天正１７）、真田氏の領地である上野名胡桃城をめぐる事件であった。この頃、名胡桃城を含む沼田領は、真田昌幸が支配していたが、小田原北条氏は以前からこの地を欲していた。

１５８２年（天正１０）、氏直と家康の話し合いで、上野を北条領とすることになったが、真田氏は、先祖ゆかりの地である沼田領の引渡しに応ぜず、未解決のままになっていた。その後、秀吉は、氏政の上洛を勧めていたが、氏政父子は応じなかった。そこで秀吉は、沼田領の３分の２を北条領とするという条件で、氏直の上洛を約束させた。しかし、氏直が上洛しないうちに、小田原北条氏は、部下の手で真田に与えられた名胡桃城を占領してしまった。

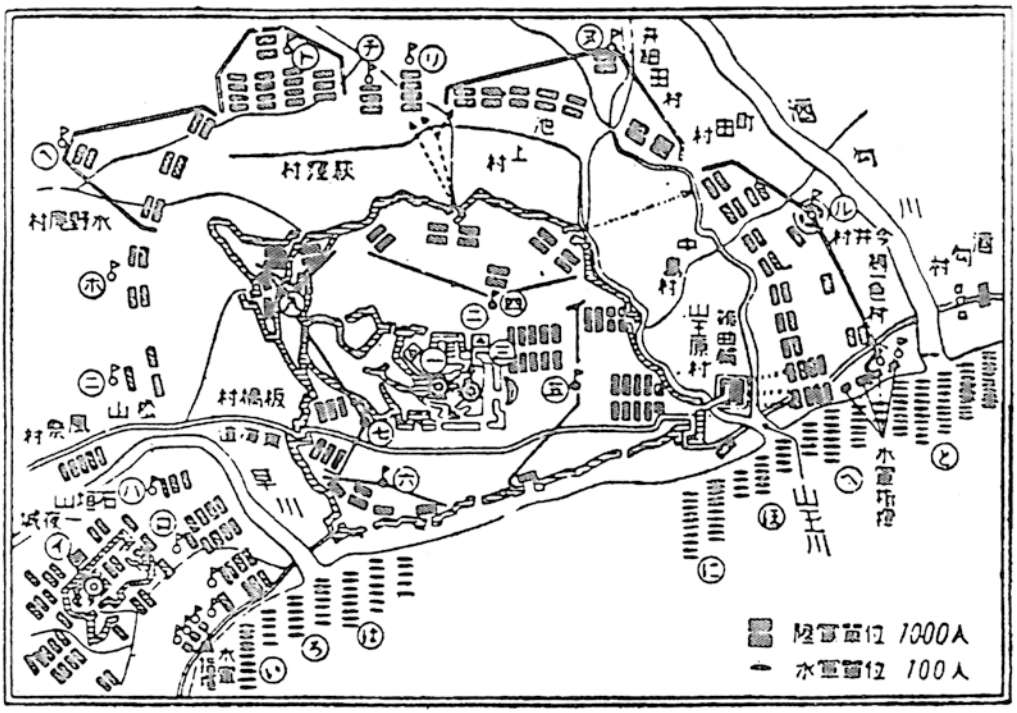
小田原北条氏の関東支配図　（「図説　小田原･足柄の歴史」より）



そこで、１５８９年（天正１７）１１月２４日、秀吉は「北条こと、近年公儀をあなどり上洛いたさず、ことに関東において我意にまかせろうぜきの条、是非におよばず……」という激しい調子の宣戦布告状を氏直に送った。

１５９０年（天正１８）３月、秀吉は、約２２万の大軍を率いて、小田原攻めを開始した。守る北条軍は、各地の支城に兵の一部を残し、約６万の兵を小田原城に入れて、籠城戦法で対抗した。伊豆の韮山城、箱根山中の山中城等を最前線として、秀吉軍に当たったが、４月４日には、小田原城は陸・海とも完全に包囲されてしまった。

小田原合戦　東西両軍態勢図



防御軍（北条方）

一　北条氏政本陣
二　北条氏直本陣
三　氏政、氏直旗本勢
四　武蔵岩槻城主　太田氏勝
五　武蔵八王子城主北条氏照
六　武蔵小机城主　北条氏堯
七　相模松田城主　松田憲秀
八　下野佐野城主　佐野氏忠

「小田原城とその周辺」による
（日本城郭協会）

包囲陸軍（豊臣方）

イ　豊臣秀吉本陣
ロ　堀秀政
ハ　池田輝政
ニ　細川忠興
ホ　織田信包
ケ　宇喜多秀家
ト　羽柴秀次
チ　羽柴秀勝
リ　蒲生氏郷
ヌ　織田信雄
ル　徳川家康

包囲水軍（豊臣方）

い　宇喜多秀家の兵船
ろ　九鬼嘉隆　〃
は　脇坂安治　〃
に　長曽我部元親〃
ほ　加藤嘉明　〃
へ　羽柴秀長　〃
と　毛利輝元　〃

包囲後互いに継続的な攻撃は行うが、小田原北条方は防備を固め豊臣方の攻撃に備え、豊臣軍も兵糧攻めによる持久策を進めたため戦いは長期戦になった。秀吉は、本陣を湯本の早雲寺から早川の石垣山に移し、城づくりを始めた。６月のある朝、北条方の兵士は、石垣山の山頂に今まで見たことのない城が一夜のうちにできているのを大いにあわてたと伝えられている。これが「太閤の一夜城」といわれている石垣山一夜城であるが、実際には８０日かかって造られた関東で初めての総石垣の城であり、秀吉が小田原城を簡単に落とせないと思っていたことをうかがわせるものである。

石垣山の一夜城跡

長期戦は、外からの援助がなければ、囲まれている方が不利になる。連日、豊臣方から降伏の呼びかけが行われた結果、降伏する者や裏切る者が現われ、ついに氏直は、７月５日降伏を決意し、使者黒田孝高を通して秀吉に申し入れた。

７月６日、小田原城は明け渡され、秀吉は１３日に城内に入った。この間、家康と外戚関係にある氏直を除いて、氏政・氏照（氏政の弟、八王子城主）、重臣の松田憲秀（のりひで）・大道寺政繁（だいどうじまさしげ）は切腹させられた。早雲の伊豆平定以来、約１００年にわたって関東を支配した小田原北条氏も、ついに滅亡した。氏直は、約３００人の家来とともに高野山（和歌山県）に追放され、１５９１年（天正１９）３０歳でその生涯を閉じた。

なお、氏直とともに追放された従兄弟の氏盛は、秀吉と家康に仕え、河内狭山（かわちさやま）藩（大阪）の大名となり、のちに１万１千石の所領を与えられて明治維新まで小田原北条氏の家系を継続させている。

小田原の役の後、秀吉から関東地方を与えられた家康は、駿河を去って江戸を本拠にして関東を支配し、小田原城主には家康の三河

以来の家臣（譜代）の大久保忠世（ただよ）が任命された。この戦によって、秀吉は伊達政宗など関東・東北の大名を戦わずして服属させ、全国の大名に秀吉の権力に武力で対抗できないことを認識させ、天下統一を実現した。

源頼朝の挙兵に始まった中世は小田原北条氏の滅亡で終わったといってよい。小田原はその両方に深い関係があったのである。

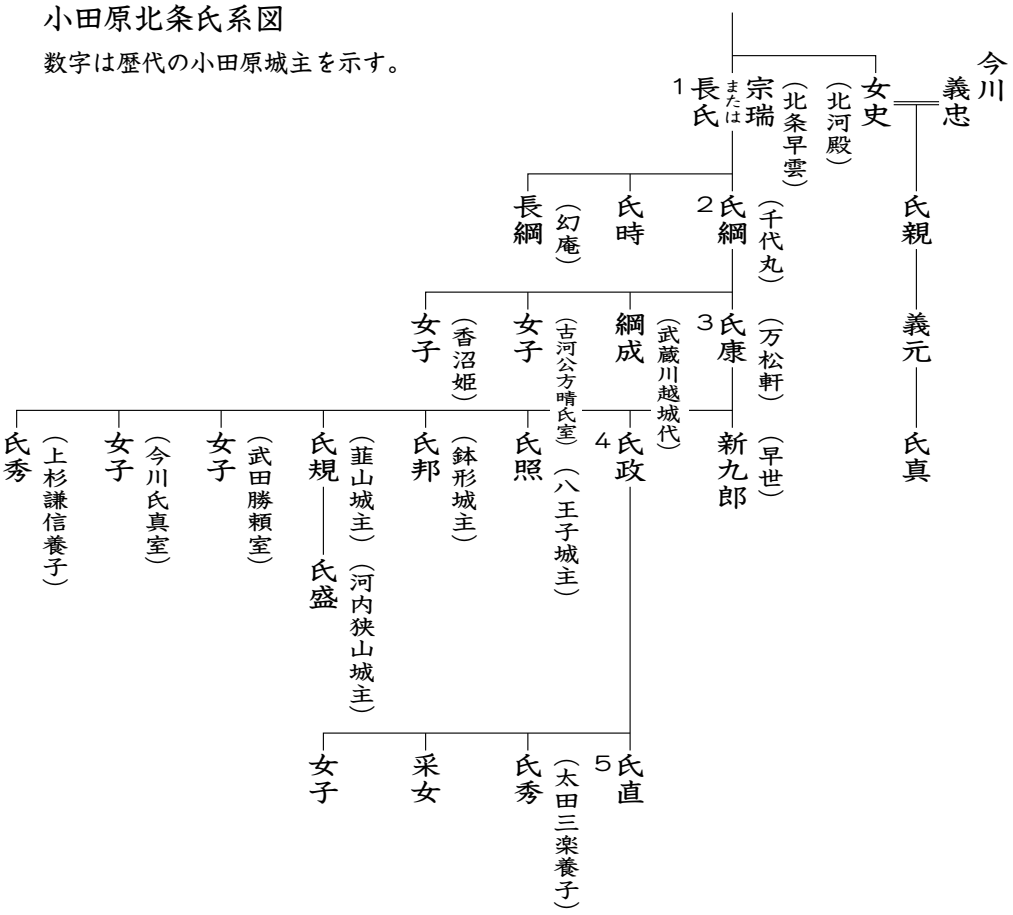
徳川家康が江戸に幕府を開くのは、小田原の役から１３年後の１６０３年（慶長８）である。

氏政と氏照の墓

小田原駅の近くに残っている

小田原北条氏系図

数字は歴代の小田原城主を示す。



2　小田原の繁栄と文化

産業の発展　⑴鶴岡八幡宮の再建　東国武士の尊崇の的であった鶴岡八幡宮は、１５２６年（大永６）里見氏によって焼かれたが、１５４０年（天文９）北条氏綱によって再建された。氏綱は、領民から寄付と人夫を出させ、家臣に工事を分担させ、京都・奈良の大工・塗師、遠江（静岡県）の檜皮師などを招いて工事を行なった。９年がかりの大工事の完成は「八ヶ国の大将軍たるべきこと疑いなし。」と記されたほど、氏綱の声望を高めた。

氏綱はすでに、早雲寺や箱根権現等を建てていたが、鶴岡八幡宮の造営で、さらに高い技術をもつことができた。招いた職人たちを、小田原や支城下等に定住させると共に、彼らを棟梁に任じて、職人の組織づくりを進め、戦国時代の小田原文化の基礎を固めた。

「小田原衆所領役帳」によると、鍛冶・大工・石工その他各業種

にわたる２８人の職人集団が、領地を与えられ、武士身分の待遇を受けていた。彼らは棟梁として配下の職人に号令し、小田原北条氏のために働いたのである。

現在の鶴岡八幡宮

一般の職人たちは、城下町に集団で住むようになっていくが、村に住む者も多かった。伊豆国松崎（静岡県）の船大工は「１年に３０日間は、材料の支給を受けて奉仕せよ。もし３０日を超えた場合は、１日につき５０文を支給する。どこで働いていても、万一の場合はさっそく奉仕せよ」とされていたが、他の職人たちもほぼ同様に、小田原北条氏の城普請や武器つくりなどに一定期間奉仕し、その他の日は、一般からの注文を受けて働いていた。したがって、仕事のないこともあり、田畑を耕作するなど、不安定な生活をしていた。以下代表的な業種について見てみよう。

⑵鋳物師と鍛冶　新宿町（浜町）には、各地から移住した鋳物師たちが住んでいた。彼らは、鍋・釜から大筒（大砲）までいろいろなものを作った。山田二郎左衛門は、河内国（大阪府）から小田原に来て、小田原北条氏の領国内で鋳物商売の特権を与えられ、次いで鋳物師棟梁に任ぜられた。小田原北条氏と豊臣秀吉との対立が生じた頃から、鉄砲・鉄砲玉・中筒・大筒などを作った。１５８９年（天正１７）末には、小田原・千津島（南足柄市）など相模国の各地に住む鋳物師を指図し、２０挺の大筒を１挺７日で製作するよう命ぜられた。

刀鍛冶は、鍛冶曲輪（小田原高校の辺り）に住んでいた。鎌倉時代の末期、すでに小田原で刀剣が鍛えられていたが、小田原北条時代になると「小田原相州」と呼ばれる刀剣が盛んに製作された。名作としては、静岡県の重要文化財に指定された「相州小田原住義助信定永正１８年」（１５２１年）の銘がある短刀が古いものである。

作者義助は駿河国島田（静岡県）出身の刀工で、彼の一門と正宗の系統を継いだ綱広の一門が競っていたと言われる。氏綱が鶴岡八幡宮に奉納した、綱家・綱広・康国の太刀も名作であり、現存している。なお、２代綱広は、鍛冶棟梁であるが鎌倉に住んでいた。

小田原鉢

また、甲冑製作では、甲斐国（山梨県）から来住した明珍家が名高い。「小田原鉢」と呼ばれる冑の名品の一つが小田原城天守閣に展示されている。奈良から移住した春田家も栄えた。さらに、武具製作には欠かせない皮職人や刀の柄作り職人なども集められ、それぞれ領地などが与えられていた。なお、１８４１年（天保１２）にできた「新編相模国風土記稿」によると、酒匂鍛冶分には「もと鍛工四十二軒余住居せしが今は七戸のみ」と記されており、この地が鍛冶の大集落として栄えたのは、小田原北条氏の時代だと考えられる。

⑶石工と紺屋　共に板橋に住んでいた。石工は、築城形式が変化して、石垣を用いるようになると大きな役割をになった。このため、江戸時代には小田原から真鶴・湯河原にかけての石材業が有名になっていった。「新編相模国風土記稿」によると、青木氏の祖先石屋善左衛門は、駿河国の石工であったが、早雲に招かれて石工の棟梁になった。各地の地理に詳しいので、早雲の出陣ごとに道案内として従い、国々にいる配下の石工に隠密の軍務を命令している。氏政から黄瀬川（静岡県）の近くに領地を、また板橋に広大な宅地をもらい、そこに配下の石工たちを住まわせていた。しかし、従わない石工もいたらしく、「なまけた石工の名前を書き出せ、島流しにするぞ」と命令したりしている。

染色業者である紺屋は、地方の村で最も早く独立した職業であっ

た。大森氏の浪人であった津田藤兵衛は、画才を早雲に認められて、旗や幟の染工になり、京都に上って朝廷の服を染め「京紺屋」の号を賜わり、はじめて柿色を染め出してもてはやされたと伝えられている。１５３０年（享禄３）より「小田原紺屋大工」として、伊豆・相模両国内の紺屋から、１軒４００文ずつの税を取る特権を与えられた。

⑷小田原名産の起源　漬物は、この時代に起こったらしい。天正年間に美濃（岐阜県）から移って、筋違橋町（南町）に出店した美濃屋吉兵衛が「しおから」を作って売り出したのが、江戸時代の小田原名産「しおから」のはじまりだと伝えられる。しかし、「梅干し」が作られたのはさらに古く、小田原北条氏が、腐らない副食物として戦場で用いたのがはじまりだといわれている。

箱根物産と呼ばれる木工品生産が、確かな記録に現れるのは、小田原北条氏が畑宿（箱根町）にあてた１５５６年（弘治２）の文書である。これによると、早雲が免税などの保護を与えてからも、なお逃げ出す者がいるので、この年に、領国内で自由に商売してよい事、一切の税をかけてはいけない事を再確認したことがわかる。この時代は、ろくろを使って汁椀やお盆などを作っており、箱根で玩具や漆器が製作されるのは、江戸時代以降のことになる。

⑸漁業　漁業が産業といえるまでに発達したのは、江戸時代に入ってからだといわれる。しかし、小田原では、小田原北条氏の時代、千度小路（本町）の辺に漁村が成立していた。船方村と呼ばれたここの漁民たちは「小田原の海賊」と呼ばれた小田原北条氏の水軍の働き手でもあった。

この頃の文書によると、国府津では、引網や釣による漁が行なわれており、船主は、１船当り月２５０文の税を氏康夫人の台所用として現物で納めていた。２５０文は、大鯛８匹分である。小田原城の台所では、塩あるいは無塩の鯛のほかに、なま干しにしたかつお・あじ・いわし・いなだ・あわびなどを用いていた。また、小八幡でもすでに漁業を行なっており、鯛を納入している。

氏直の名代で上洛し、豊臣秀吉を訪れた北条氏規が、かつぎと呼ばれた真鶴の海士２０人に、三崎（三浦市）で「のしあわび」を作らせてみやげにしたとも伝えられる。なお、江戸時代に書かれた「小田原北条盛衰記」によると、氏綱が西国から漁師を呼び、地獄

網という大網で海底の魚や貝を採らせたとあるが確証はない。

「だるま市」として残っている飯泉観音の市

⑹市と貿易　「だるま市」で名高い飯泉観音の門前市は、古くから開かれていたが、小田原北条氏は、１５６２年（永禄５）「一、税をかけてはいけない。一、無理に買い取ったり、乱暴したりしてはいけない。一、けんかや口争いをしてはいけない。」という法度を出して、土地の領主や特権商人をおさえ、領国経営に役立てるようにした。小田原北条氏は、城下町やその近くの市とは別に、１５６４年（永禄７）以後、月に６回市が開かれる「六斎市」を新田地域などの各地に設けた。六斎市は、いわゆる楽市で、すべての税を免除し、特権的な商人を占め出し、新しい商人や農民が集まりやすくしたものである。小田原北条氏が六斎市を設けたのは、農民からの税を永楽銭などの銭で取るために、銭の流通を広めたり、交通機関としての宿駅の整備、新田開発の促進などを行なったりするのがねらいであったと見られている。

これらの市で売買された物は、塩・米・麦・布・木綿・漆・釜・鍬などが主であり、唐物といわれた輸入の高級工芸品もあったが、これらは、小田原北条氏や寺院などが買っていたようである。

「異本小田原記」は、「１５６６年（永禄９）唐人の船が三崎に来て、錦・織物・焼物・香・宝石などを売って帰国したが、唐人の何人かは、残って小田原に住み、商人になった。」と記している。また「北条五代記」なども、「天正年間に三官という唐人が氏政の朱印をいただいて明に渡り、永楽銭等を輸入した。」と伝えている。共に江戸時代の著書であり、確証はないのだが、早雲寺には中国から伝わった物も残っており、明との交易は行なわれたものと見られている。

⑺ういろう　戦国大名である小田原北条氏は、関東の広大な領国を経営するために、有力な商人を取り立てた。その代表と見られるのが、外郎＝宇野氏である。祖先は元の臣であったが、帰化して足利将軍家の侍医となり、明に使して秘薬霊宝丹を持ち帰り、透頂香＝ういろうと名付けて売り出した。５代目で宇野氏を継いだ藤右衛門尉定治が、１５０４年（永正１）早雲に招かれて小田原に下り、氏綱に「この薬は、口臭を除き、睡眠を去り、命をのばす。」と言上して屋敷をもらって住んだと伝えられる。領国内での販売は無税という特権を与えられ、小田原北条氏の領国の拡大と共に商圏を拡げ、今成郷（埼玉県）の代官も勤めた。その子孫は、商人でありながら武士でもあり、次第に領地を増やすと共に、常に公用の馬３頭を与えられてこれを利用していた。小田原北条氏滅亡後の１６３０年（寛永７）でも当麻の市（相模原市）に若衆２１人を連れて参加している。

外郎家のような武士身分の豪商は、各支城下にもおり、隊を作って各地の市を巡回している配下の商人たちを指図していた。そうした中で、すでに店が城下に軒を並べていたといわれる小田原は、公用の馬を用意している宿駅でつながれた道路網に支えられて、関東地方における商業活動の中心であったのである。

⑻農業技術の進歩　戦国時代は、動きの激しい時代であったが、その原動力は、農業技術の飛躍的な進歩であった。この時代、各地に農村鍛冶が生まれたので、鍬や鎌を農民が入手しやすくなった。牛や馬を飼う農民も増え、自分の考えで農業を行なうことが多くなった。水田では、米と麦の二毛作が、畑では、麦・大豆・そばなどの多毛作が行なわれ、肥料として山野の下草が用いられるようにもなり、「草木を勝手にとってはいけない。」という掟がたびたび出されるようになった。

新田開発の様子もかわった。１５５０年（天文１９）の下中村上町（小田原市）の検地帳によると、有力農民の開発した田畑の脇に、小面積の田畑を持っている者がいる。これは、有力農民の家で働かされていたような農民が、暇を見つけては自然条件の悪い所にも田畑を開き、自ら年貢を納めることによって一人前の農民に向上しつつあることを示している。

開発は、主として山すその畑や谷合いの水田を開いた前の時代と

異なり、大きな川の下流の平野にまで広がった。今井（寿町）の農民が開発したと見られる河原新田（中新田）、農民剣持宗盤による曽比の再開発、農民善左衛門らが中心となって開発した新屋村（中里）などが、小田原北条時代に開かれている。１６１８年（元和４）の新屋村の検地帳を見ると、耕地所有者が村の戸数の２倍を越える百余名に達しており、近くの村々の農民が、積極的に開発に参加していたことがうかがわれる。

しかし、強制までして新田開発を進め、各地に堤を築き、用水路を開いたといわれる小田原北条氏も本拠の足柄平野には、築堤などの記録も伝承も残していない。だが、この地方の生産力は、相模の国内では最も多く、平均１０アール当り１５０kgを越える米の収穫高があったものと推定されている。さらに、この時代からわが国で栽培されるようになり、軍用品としても重視されていた木綿も、斑目（南足柄市）・神山（松田町）などで栽培されていた。

戦国時代の小田原文化　⑴学問と文学　早雲は、戦国武将の中でも好学の将だった。「今川本太平記」の奥書には、早雲が各種の太平記を集めて比べ合わせ、それを足利学校（栃木県）に送って究明してもらったり、上京した時には、学者に朱筆を入れてもらって読み方を習ったりしたと書かれている。また、現在の「吾妻鏡」の基礎となった「慶長版吾妻鏡」の原本は、早雲以来伝えられた「北条家本吾妻鏡」であった。

足利学校は、儒学を中心に易学・兵学などを講じていたが、氏康は、当時の校主九華を尊敬し彼を援助した。九華は３０年間もここで教育に当り、三千余の学僧や武士を教えた。また、鎌倉幕府の執権北条氏の滅亡以来荒れていた金沢文庫（横浜市）の蔵書を小田原に運んでその活用をはかり、足利学校に寄付したりしたのも氏康であった。

この時代、小田原でも和歌や連歌が盛んに行なわれるようになった。早雲は、「歌道なき人は、無下に卑しき事なり。」と述べ、三浦氏を追って鎌倉に入った時、「枯るる木にまた花の木を植ゑそへて、もとの都になしてこそみめ」と、意気盛んな歌をよんだと伝えられている。

１５０２年（文亀２）「新撰菟玖波集」を編集して連歌を完成さ

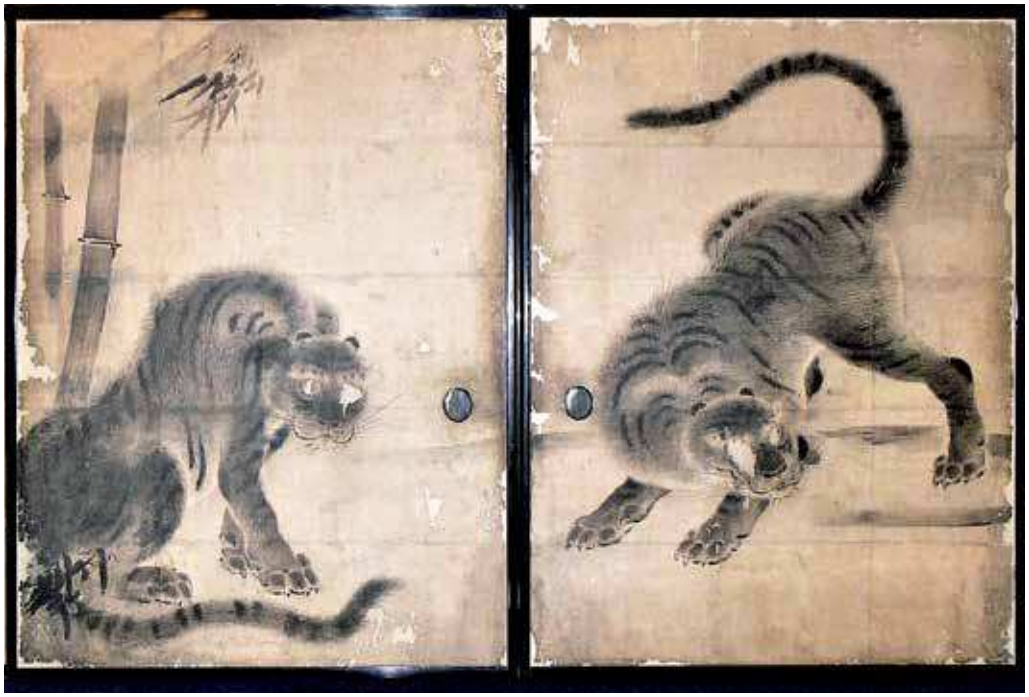
北条早雲像

北条氏康像

せた宗祇が湯本で死んだ。その後も宗長・宗牧など連歌界の第一人者がたびたび小田原を訪れている。小田原北条氏は彼らを優遇し彼らを通して、京都の学問・文学だけでなく、有力大名の城下町に興りつつあった新しい文化をも吸収して行ったのである。氏綱は「田舎連歌」と自称しながらも、早川の心明院（久翁寺）に宗長らを招いて、千句の連歌会をたびたび催したと伝えられる。氏康も戦陣の合間に歌を作って、京都の三条西実隆に送り指導を受け、狂歌を作って志気を高めたなどと伝えられている。

侍たちも、京都から連歌師を招いて歌を学び、花見の歌会を開いたそうだし、軍略を論じた席で、集団戦における規律の重要さを歌で指摘した大石某が氏政から足軽百人の将に抜てきされたとも伝えられている。

⑵芸能　１５４６年（天文１５）３月２２日、松原明神で盛大に能が催された。宝生・今春・落観世・金剛の小田原四座による御法楽の能七番に次いで、納めは、四座の太夫４人によって四方の夷を切るといういわれのある泰平楽が舞われた。これは、前年来、関東の大軍に川越城を囲まれたりして窮地に立たされた氏康が、諸社へ



早雲寺のふすま絵「虎」

の祈願行事の打ち上げの催しだった。３日後出陣した氏康は「川越の夜討ち」で大勝したといわれる。

小田原四座を形成した役者たちは、早雲や氏綱の頃、京都を離れて領内の各地に住んだと伝えられている。古新宿町（浜町）の天十郎太夫は、早雲より名を賜わり、関八州の同職への触頭を勤めた。荻窪の舞太夫治部左衛門は、１５８８年（天正１６）末に公用の馬五頭を提供されて、鉢形（埼玉県）まで興行に出かけている。侍の中にも、余興に能を舞ったりする者がいたそうである。

１５８９年（天正１７）豊臣秀吉に背いて小田原に来ていた利休の弟子宗二が、小田原北条氏の重臣板部岡江雪斉に伝えた「山上宗二記」は、今日、茶道の書として最も権威のあるものだとされている。小田原にも茶の湯を流行させる基盤ができていたのである。「異本小田原記」は、その様子を「宗二によって茶の湯がことのほかはやり、早川・荻窪・久野などに茶室を作り、北条家の一門・重臣らが巡礼や虚無僧などの服装をして毎日出入りし、これを異風の茶の湯と呼んでいた。心ある人は不吉の兆候といったが、はたして数年のうちに北条家は滅びた。」と記している。

湯本の早雲寺は、氏綱が１５２１年（大永１）に建立した寺であり、小田原北条氏の文化遺産の宝庫である。有名な早雲などの三代画像や竜虎のふすま絵をはじめとした絵画、氏政使用の織物張文台および硯箱、氏政寄進の芹わんなど、この時代から江戸時代初期にかけての作品で、国や県の重要文化財に指定されているものを多数蔵している。

氏政は、截流斉と号して絵をよくし、水墨画の雪舟を学んだ雪村とも交わりがあり、狩野玉楽らを中心とした「小田原狩野派」と呼ばれる多数の画工を召抱ていた。画工たちは、寺社の建立に参加して絵を描き、明伝来の絵を模写したりして業を磨いて、関東から東北方面にまで影響を与えたといわれる。

⑶早雲寺殿二十一箇条　「小田原北条家の侍は、仁義をもっぱらとし、礼儀作法正しく、其様厳重ありて形義を乱さず、もし異様を好み、分限にすぎたるふるまいをなす者をば、人あざけるゆえ、律義をたしなみ、君臣の礼いよいよ重んじたまえり。」と「北条五代記」が記している。こうした道徳性は、「早雲寺殿二十一箇条」と呼ばれる早雲の教えとかかわって成立したようである。

この教えは「仏や神を信ぜよ。夜は８時に寝、朝は５時に起きよ。家の中でも大声を出すな。家に居ても早く髪を結え。出仕の時は仲間の様子を見てから御前に出よ。暇があれば本を読み、馬に乗れ。上下万民にうそをつくな。良友は学問の友、悪友は碁・将棋・尺八の友。家に帰ったら家のまわりを調べよ。夕方６時には門を閉め、自分で火の用心をせよ。」など、家臣の心得を説いたものである。

特に第５条は「心をまっすぐ、やわらかに持ち、正直を信条とし、下の者は上の者を敬い、上の者は下の者を憐れみ、ありのままな心持ちでいれば、たとい祈らなくても神の加護がある。」と述べており、「慎しみ」を根本において、生活を自ら正して行くことをねらい、形式的な古い礼儀作法に代わって、新しい戦国武士の礼儀の本質を説いている。

「早雲寺殿二十一箇条」は、習字の手本として、関東で広く読み習われたというが、小田原北条氏の文教政策の基本に据えられ、侍たちに対して文武兼備を理想としながら、独特の文物・風俗を形成させていく。氏直の代には、正月７日の「お弓はじめ」の犬追物、「鉄砲はじめ」その他の年中行事が催された。神社や寺院の門前で

はもちろんのこと、道で会う人ごとにあいさつをかわすようになったそうである。また、「賢臣二君に仕へず」といって、侍たちは歯を黒く染めた。「小田原風」と呼ばれる髪型や着物の着付け、上下なども生まれたといわれる。

⑷戦乱の時代を生きた人々　まず、小田原北条氏随一の文化人であり、小田原北条文化の保護者でもあったといわれる北条幻庵の生涯を見てみよう。彼は、父早雲の小田原攻略の２年前、母の実家葛山（静岡県裾野市）で三男として生まれた。小田原に移って間もなく、箱根権現に預けられ、大森氏出身の海実僧正から真言の学を学び、三井寺などにも遊学した。３３歳頃箱根権現第４０世の別当となったが、在任１０年余で辞職し、僧籍のまま北条長綱と名のり、氏綱亡き後、氏康・氏政を武略で助けた。彼の領地は５千貫文余であり、一門中最大であった。５０歳頃入道して幻庵と号した。

１５４５年（天文１４）には、連歌師宗牧と深い交わりがあり次の歌を残した。

「身をかへて慕うとも知れ人がらに、なおなつかしき袖の別れ路」

幻庵は、技芸の素質に恵まれていた。伊勢氏相伝の鞍作りのほか、弓矢・庭の築山・茶ひきうす・尺八などの製作で名人といわれた。とくに一節切の尺八は「幻庵切り」と呼ばれて流行し、天皇からも注文があったので、小田原の若侍がみな尺八を習ったと「北条五代記」が記している。

幻庵は、小田原北条氏が滅びる８ヵ月前に久野の屋敷で死んだ。９７歳という長い生涯を小田原北条氏の盛衰と共に生きたのである。

「北条幻庵おぼえ書」という文書がある。これは、氏康の娘が武蔵の豪族吉良氏に嫁いだ際、心得るべき礼儀作法を記して与えたもので、当時の関東武士の生活を示す貴重な資料である。「夫は上さまと呼び、なに殿と書きなさい。母は御たいほうと呼び、大かた殿と書きなさい。」などということから結婚式や年中行事の式法を懇切に説いている。

戦国時代において、大名と大名の間での味方の約束は、多くの場合結婚を保証条件としていた。いわゆる政略結婚であり、小田原北条氏もこれを行なった。先の吉良氏へも氏綱の娘とその子、さらに氏康の娘を送り込んでいる。政略結婚の犠牲となったともいえる人

北条幻庵おぼえ書

（世田谷区立郷土資料館蔵）

に武田勝頼夫人がある。長篠合戦に敗れた勝頼は、小田原北条氏を恐れ、手をつくして氏政の妹を妻にした。しかし、勝頼は結婚の翌年、上杉謙信の死を機会に上杉景勝と結んで、謙信の養子となっていた氏政の弟景虎を自害においこみ、以後小田原北条氏とは敵になってしまった。「北条五代記」は、天目山で滅びる前「氏政の援助をとりつけてくれ。」という勝頼のことばに対して、夫人は「兄景虎を殺しておいて面目があろうか。」と答え、勝頼より先に自害したと記している。時に夫人は１９歳。辞世の歌は、

「黒髪の乱れたる世にはてしなき　おもいに消ゆる露の玉の緒」

だが、戦乱の影響は、農民たちには、武士以上に大きいものであった。豊臣秀吉の小田原攻めが予想される頃、酒匂本郷に次のような動員令が出された。

○侍でも百姓でも弓・やり・鉄砲、ない者は鍬でも鎌でも持って出よ。
○１５歳から７０歳までの男子は１人残らず出てこい。
○もし１人でも隠しておいたことが知れたら、小代官・百姓頭を切る。
○この度、心有る者は、やりを磨き、旗を持ち、よく働け、郷中で似合の望みをかなえてくださるぞ。
○来る２５日、飯泉河原へ小代官・百姓頭が連れて来て、公方の検使の前で帳面につけて帰れ。

農民は、戦が近づけば城普請に出されることも多くなり、戦となれば戦場に動員され、味方にさえ家を焼かれたり、財産を奪われたりした。中には兵庫助・大学などの侍名を持ち、侍と先を争って「国の用に立つ」者や新田開発に努める者もある一方で、人夫を銭で免れようとしたり、人改めや年貢をごまかそうとしたりする代官や有力農民もあった。それぞれが、生活を守り向上させようと懸命であったのである。

桑原にある「おつむ塚」は、昭和になって再建されたものである。碑面に「元亀・天正の往時」「悲運に亡びし戦さ人の数多かうべを集めて、吾等が祖先懇に弔い埋めしが此の塚の起因なるべし」とある。この辺は、謙信・信玄・秀吉らの小田原攻めのたびに戦場になった地で、戦死者を葬った塚が各所に残っており、今でも「祟りの榎塚」「祟り田」などと呼ばれて祭られている。

山角町（南町）にある居神神社は、三浦義意を祭っている。「早雲に攻められて自殺した義意の首が、三崎から飛んで来てここの松にかみつき、３年間目を開いていた。ここを通る人が鬼にあって何人も死んだ。総世寺の僧が歌をよんだらようやく首が落ちた。その時、空から当地の守護神になるとの声がしたので、祠を建てて鎮守にした。」と「北条五代記」などに記されており、小田原北条時代より祭られていた。戦国の世に生きて滅びた人々を弔い続けた無名の人々が生み出した記念碑や伝説である。

おつむ塚

小田原が、関東地方を支配した小田原北条氏の本城の地であった時代、産業も文化も急速に花開いた。し

かし、それらは、小田原北条氏の強力な政治権力と大きな経済力を支えるものとして育てられたものであった。したがって、小田原北条氏の滅亡によって、かつての繁栄は失われていったのである。